

県営干拓地等農地整備事業関係発掘調査
報告書 — II
— 塚町南遺跡 —

1985. 3

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県下における県営は場整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、事業の拡大とともに、その件数も年々増加し、干拓関連遺跡の調査も2年目を迎えております。

調査を行なった近江八幡市は県内でも有数の文化財の宝庫であり、中でも琵琶湖の汀線の周辺に分布する遺跡は、滋賀県の歴史を明らかにする鍵を握っているといつても過言ではありません。

ここに、本年度実施しました発掘調査の報告書を刊行し、広く埋蔵文化財に関する理解を深めていただく一助にしたいと存じます。

最後になりましたが、発掘調査にご理解をいただきました地元関係者並びに関係諸機関に対し、深く感謝を申しあげますとともに、当報告書の刊行にご協力いただきました方々に対しても厚くお礼申し上げます。

昭和60年3月

滋賀県教育委員会事務局

文化部文化財保護課長

市 原 浩

例　　言

1. 本報告書は、昭和59年度県営干拓地等農地整備事業に伴う塚町南遺跡の発掘調査成果で、県営干拓地等農地整備関係遺跡発掘調査報告書のIIに当る。
2. 調査は、滋賀県農林部耕地建設課の依頼により、滋賀県教育委員会の指導のもとに財団法人滋賀県文化財保護協会が実施した。なお、調査の実施については地元近江八幡市教育委員会へお願いした。
3. 調査の体制は以下の通りである。

調査主体 滋賀県教育委員会

調査機関 財団法人滋賀県文化財保護協会

調査指導 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課主
　　査田中勝弘、技師葛野泰樹、同田路正幸

調査者 近江八幡市教育委員会社会教育課技師岩
　　崎直也、嘱託角上寿行、同篠宮 正

なお、調査を実施するにあたり、地元多賀・北之庄
町の方々にお世話になった。

4. 本書の編集は岩崎が当り、執筆・文責は各項目の末尾に記した。遺物写真については寿福滋氏の協力を得た。

目 次

序

例 言

1 はじめに.....	1
2 位 置.....	1
3 調査の経過.....	3
(1)調査の概要.....	3
(2)調査日誌(抄).....	3
4 遺 構.....	4
5 遺 物.....	7
6 小 結.....	13

挿図目次

挿図 1 遺跡位置図.....	2
挿図 2 S R 1, S D 1 断面図.....	4
挿図 3 S K 1, 2 実測図.....	6
挿図 4 古墳時代の土器類.....	8
挿図 5 S K 1, 出土土器類.....	10
挿図 6 漢式系土器拓影.....	11
挿図 7 平安時代以降の土器.....	12

図版目次

図版1	遺跡	1. 調査地遠景（東上空より）	15
		2. 調査地遠景（中央が黒橋川と調査地）	15
図版2	遺跡	1. 第1トレンチ全景（北方より）	17
		2. SK1 土器出土状況（南北より）	17
図版3	遺跡	1. 第3トレンチ全景（南方より）	19
		2. SK2（北方より）	19
図版4	遺跡	1. SR1 検出状況（南方より）	21
		2. SR1 土層堆積状況（北方より）	21
図版5	遺物	古式須恵器と漢式系上器	23
図版6	遺物	古墳時代の土器類	25
図版7	遺物	平安時代以降の土器類	27
図版8	調査区位置図		29

1. はじめに

本調査は、滋賀県の実施する昭和59年度県営干拓地等農地整備事業（近江八幡東部地区多賀工区）に伴う発掘調査である。塙町南遺跡は当該地の北部に弥生時代の遺物が分布する塙町遺跡があり、前年度の調査の結果、さらに、事業実施前の遺跡確認調査によって周知された遺跡である。

しかし、遺物の散布状況から遺跡の範囲、性格、時期等を明らかにすることはできず、事前に発掘調査を行ない、遺跡の保存策を講じることにした。

発掘調査の現地調査および整理は昭和59年6月から昭和60年3月までとした。調査は文化財保護課が農林部耕地建設課より予算(6,660,000円)の再配当をうけ、財団法人滋賀県文化財保護協会に委託し、近江八幡市教育委員会の協力を得て実施した。 (葛野泰樹)

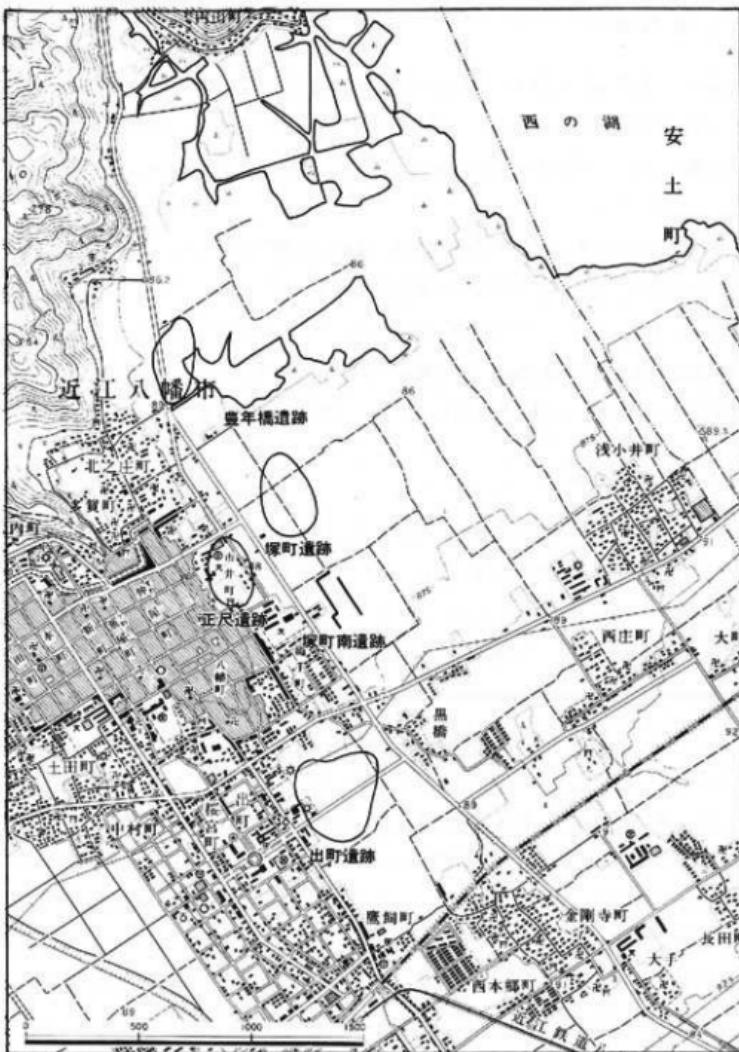
2. 位 置

塙町南遺跡は、近江八幡市多賀町に所在する。多賀町は、鶴翼山（八幡山）と八幡堀をはさんで南北にまたがる農業地域で、西の湖に面しており、本遺跡は、その南東部に広がる水田に現在の黒橋川をはさむ形で位置する。地形は、内湖の干拓等により旧状を変えているものの、遺構を検出した標高は、海拔約86m前後を測る。

本遺跡周辺には、北方に塙町遺跡、豊年橋遺跡、西方に正尺遺跡、南方に出町遺跡等がある。これらの遺跡は、塙町南遺跡と同じように、低地に広がる沖積平野部に立地し、西の湖を初めとする旧内湖周囲に存在したと思われる。

中でも、本遺跡の北に近接する塙町遺跡は、昭和58年7月に県営干拓地農地整理事業に伴ない、発掘調査が実施された。調査の結果によれば、古墳時代から、中世期にかけの遺物が検出されており、今回の調査においても、併行した時期の遺物・遺構を確認した。しかし、遺跡の範囲については、若干の異なりを見せる。前回の塙町遺跡の調査では、遺跡は、調査区より東に広がり、中心は、東方にあると考えられ、南へ向って旧内湖に続く低湿地の様相を示す結果となっているが、今回の調査で確認された結果は、むしろ塙町遺跡からは、遺跡は南方方向に伸び塙町南遺跡に続くのではないかと考えられる。いずれにせよ、広い低湿地に点在するわずかな微高地を利用し、旧内湖の周囲に、人々が生活していたことを示唆している。

(角上寿行)



挿図1 遺跡位置図

3. 調査の経過

(1) 調査の概要

近江八幡市東部七地改良事業多賀工区内において本年度河川改修並びに農地整備工事が計画されたため、県教育委員会の依頼により近江八幡市教育委員会が当該地内を昭和59年5月12日～15日、立会調査を実施した。調査の結果は遺構の出土したもの7ヶ所、遺物の出土したもの12ヶ所であった。この結果に基づき文化庁長官宛、遺跡発見通知を提出し、遺跡として周知された。遺跡名は、塚町遺跡の南側に所在することから塚町南遺跡と命名した。

調査は工事との関係から黒橋川改修地区から開始した。河川部分の長さ200m幅10mに対して幅3mの試掘用トレンチを設定し、遺構の状況により拡張する方法をとった。なおトレンチの長さは任意に設定した。表土除去は重機により行った。黒橋川地区は8月3日終了し、8月4日より小排水36号地区の調査を開始した。小排水路は長さ400m幅3mに対して幅2mのトレンチを設定した。またトレンチの長さは任意に設定し、表土除去は重機により行った。現地調査は6月21日より開始し9月20日終了した。

尚実測図作成、写真等の記録は隨時行った。

(2) 調査日誌（抄）

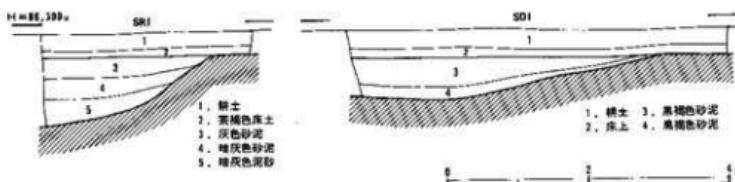
- 6. 21 器材搬入、トレンチ設定
- 6. 21～6. 29 重機により表土除去。40～50cmで黄褐色のベースに達する
- 7. 4 第1トレンチで土壤（SK1）検出。古式須恵器、土師器、漢式系土器出土。
- 7. 6 第2、3トレンチで自然流路（SR1）検出。土錐出土。
- 7. 7 第3トレンチで土壤（SK2）検出。黒色土器出土。
- 7. 19 第6トレンチ北側で自然流路（SR2）を検出。
- 7. 20 第5トレンチ南側で自然流路を検出。第6トレンチの自然流路（SR2）と同一と思われる。遺物は少ない。
- 7. 25 第7トレンチ北部で東西方向に走る流路（SR3）を検出。
- 8. 3 本日にて黒橋川地区（第1～第8トレンチ）終了する。
- 8. 4 本日より小排水36号地区調査開始。東西方向の第9～11トレンチ、南北方向の第12トレンチを設定する。
- 8. 4～8. 8 重機により表土除去。40～50cmで黄褐色のベースに達する。

8. 6 第9トレンチにて溝（S D 1, 2）検出。遺物認められず。
8. 21 第13～24トレンチ設定
8. 21～9. 3 重機により表土除去。40～60cmで黄褐色のベースに達する。
8. 23 第13トレンチ南半で自然流路（S R 4）検出。
8. 31 第16トレンチ南端で自然流路（S R 5）検出。
9. 1 第17トレンチ北端で自然流路（S R 5）検出。第16トレンチのものと同一と考えられる。
9. 7 第19トレンチ南部、第20トレンチ北部で自然流路（S R 6）検出。
9. 13 第21トレンチ中央部分で土壤（S K 3）、溝（S D 4）を検出。
9. 20 本日で現地調査は全て完了。

(篠宮 正)

4. 遺構

今回の調査では、地表下約40～50cmで遺構面を検出した。遺構面を覆う土層は、表土の耕上と床土で包含層は認められなかった。ベースは淡黄褐色粘質上で、溝、自然流路等は暗灰色砂泥、黒褐色泥砂等で、はっきりした検出状況を示す。土壤は比較的ベースの色調に近く、質による違いがみられる。また、近世・近代の耕作における溝状の掘込みも隨所に見られ、瓦、染付等の遺物も出土している。遺構の密度は少ないものの、隨所で各種の遺構が検出された。また、遺構面は黒橋川の流れる方向、南から北に向ってゆるやかに下っているが、ほぼ平坦で、海拔86m前後を測る。以下主要な遺構の説明を行う。



挿図2 SR1, SD1断面図

自然流路

S R 1 第2～3トレンチにかけて検出した自然流路である。平面形でみると限界かなり蛇行している。南から北へ流れ現在の黒橋川との関係が注目される。西側の肩はトレンチ外のため確認できないが、断面を観察する限り幅6m以上あると推定される。深さ1.3m以上で断面形はゆるやかなU字状を呈すると考えられる。埋土は、3層認められ、上層は灰色砂泥、中層は暗灰色砂泥、下層は暗灰色泥砂である。遺物は上層から出土し、平安時代土師器杯、黒色土器、土錐が出土した。

S R 2 第5～6トレンチにかけて検出した自然流路である。幅6mで東から西に向って流れる。深さ0.9mで、断面形は逆台形を呈する。埋土は4層に分かれ第3層はスクモ層で、第4層は砂層である。遺物は第1層から中世の土師器小皿、第4層から、古墳時代前期の土師器甕が出土する。

S R 3 本溝は第7トレンチの北側で検出した自然流路である。方向はN-55°-E示す。流路の北側の肩はトレンチ外にあるため正確な幅はわからないが、断面の形態から推定する限り約6.5mを測ると思われる。深さは0.7mを測り、断面形はゆるやかなU字状を呈する。埋土はレンズ状堆積を呈して2層に分かれる。上層は黒褐色を呈し、下層は灰白色の粘土粒を混入する。遺物は上層で古墳時代土師器甕、下層では古墳時代前期土師器甕、壺、鉢、平安時代灰釉陶器瓶子が出土しており、層位的に逆転する。このことから遺構の年代は平安時代のものであると考えられ、古墳時代の遺物は混入したとみられる。

この溝は、黒橋川の対岸に位置する水路に対応するものと考えられ、また、水田の畔とも対応してくる溝であると考えられる方向は条里の方向を示す。

S R 4 第13トレンチの南半分で検出した自然流路である。東西方向に流れ、幅約11mを測る。断面形はゆるやかに傾斜する壁をもち逆台形を呈する。埋土は3層に分かれ、中層はスクモ層、下層は砂層である。

S R 5 第16～17トレンチにかけて検出した自然流路である。ほぼ南北方向に流れる。幅7.4mを測る。深さは0.7mで断面形はゆるやかなU字状を呈する。埋土は5層に分かれ最下層はスクモ層である。遺物は4層、5層で古墳時代前～中期の土師器甕、高杯が出土している。また最下層からは樽の実を採集している。

S R 6 第19～20トレンチにかけて検出した南北に走る自然流路である。幅約9mを測り、深さは0.4mで断面形はゆるやかなU字状を呈する。埋土は3層に分かれ、遺物は上層において古墳時代前期の土師器高杯、甕が出土する。また下層において椎の実を採集した。

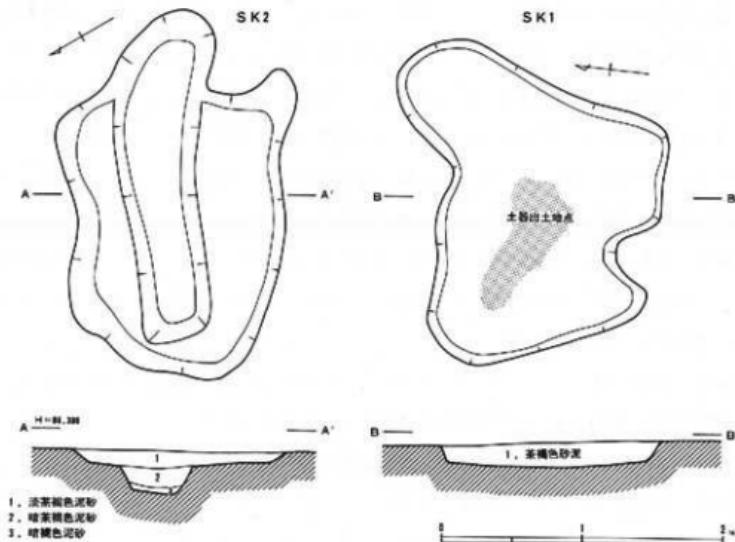
溝

S D 1 本溝は第9トレンチの東端で検出した溝である。方向はN-35°-Wを示す。溝の東側の肩はトレンチ外であるため溝の幅はわからないが、調査範囲内では2.7mを測る。深さは0.4mを測り、断面形は逆台形を呈する。埋土は2層認められたが、遺物は出土しない。

S D 2 第9トレンチのSD 2の2.7m西に平行して走る溝である。幅は、4.8mを測り深さ0.6mで断面は逆台形を呈する。埋土は2層認められたが、遺物は出土しない。

S D 3 第17トレンチ北寄りで検出した溝である。方向はN-38°-Eを示す。幅は1mを測り深さ0.2mで断面形はU字状を呈する。埋土は単層で遺物は古式土師器が少量出土した。

S D 4 第21トレンチの南寄りで検出した溝である。方向はほぼ南北を示す。幅は0.7mを測り、深さ0.15mで断面形はU字状を呈する。遺物は出土しない。



挿図3 SK1, 2 実測図

土 壤

S K 1 第1トレンチ北寄りから検出した土壤である。長辺2m短辺1.5mの不整方形で一部張り出しが付く。深さ0.2mで底部はほぼ平坦である。埋土は単層で茶褐色砂泥であった。遺物は土壤全体に認められ、主として中央部分にかたまって出土する。古墳時代中期の土師器壺、高杯、古式須恵器壺に伴って漢式系土器の甕が出土した。

S K 2 第3トレンチ東拡張部分で検出した土壤である。長辺2.6m、短辺1.5m、深さ0.1mの不整長円形の掘込みに、長辺2.32m、短辺0.6m、深さ0.2mの長円形の掘込みをもつ2段土壤である。長辺の方向はN-63°-Eを示す。下段の掘込みの断面形は逆台形を呈する。東側の幅は北側の幅より約0.1m広い。埋土は3層に分かれおり上層は淡茶褐色泥砂、中層は暗茶褐色泥砂である。遺物は中層より平安時代後期の黒色土器碗、土師器小皿が出土した。この土壤は形態からみて土壤墓の可能性をもつ。

S K 3 第21トレンチ南寄りで検出した土壤である。長辺0.6m、短辺0.4m橢円形を呈する。深さは0.15mで断面は擴鉢状を呈する。埋土は単層で遺物は確認できなかった。

(篠宮 正)

5. 遺 物

本遺跡の調査において出土した遺物は、土壤、自然流路、溝さらには表土中から発見されたもので、各種類にわたる土器類と、他に少量ながら石器類がある。なお出土遺物の量は、コンテナにしておよそ三箱余りである。

一方、出土遺物の年代は縄文、古墳、平安、鎌倉、室町、江戸の各時代に及ぶが、中でも古墳時代中期に属する資料が目立った。以下、古墳時代と、平安時代以降の遺物に分けて概述してみよう。

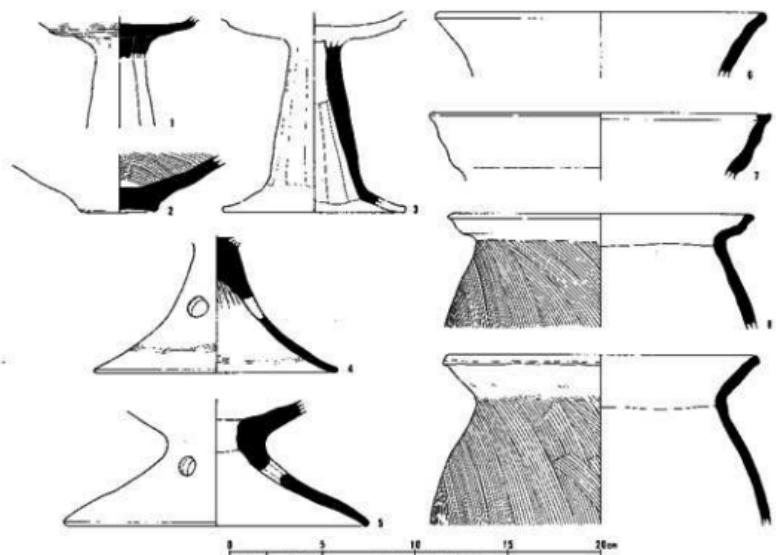
(1) 古墳時代の土器類(挿図4)

壺(2)は、底部がわずかに突出気味で、明確な平底をとどめている。外面の調整は器表が摩滅しており明確ではないが、ヘラミガキを施したものらしい。内面には、逆時計廻りにクモの巣状にハケ目調整する。胎土は、1mm前後の石英、長石、チャート粒を少量混入するが精良で、色調は淡褐色を呈する。表土中からの出土ではあるが、その形態、手法からみなして庄内式併行期と考えられる。

高杯には、脚部がラッパ状の開く形態のもの(4)と、筒部と袖部が明瞭に区分出来るもの(1・3)がある。本稿では仮に前者をA類とし、後者をB類とする。

A類は、円孔を三方にもち、脚部の径は13.2cmを測り、端部を丸くおさめている。外面の袖部には、かすかにヨコ方向のハケを残している。内面の上部には、しばり目が細密に残り、胎土は精良である。内面下半にも、かすかにヨコ方向のハケをとどめている。杯部の形態については、つまりらかではない。

B類は、脚筒部に比して、裾部の小さな形態と推定される。杯部は欠損するが、体部を円盤成形する有段に形態を呈するものと思われる。杯部と脚部を分割して形成し、接合したことが分かる。その際、杯部の中央に粘土を貼り、脚上部を接合し、さらにその外周を他の粘土で補強している。さらに、当初、杯部中央に貼った粘土と脚筒部内面の接合を強固とするため、下部より棒状（竹管か）原体で押圧している(1)。脚筒部内面は、しづつた後へラ状原体で時計廻りに削って仕上げている。なお、しばりの際の外面の成形痕を消すためか、板状原体で上から下へナデて仕上げている(3)。



挿図4 古墳時代の土器類

A類は、古墳時代前期、B類は5世紀に出現する形態とみなされる。

器台(5)は、杯部を欠損するが、およそ脚部を倒立した形態を有したものと推定される。丈が低く、大きく開いた脚部は、直徑16.4cmを測る。その中央よりやや上位に凹孔を三方に穿つ。透し穴は一端円孔を穿ってさらにその周囲を内外面ともヘラ削りして仕上げている。その形態等から古墳時代前期の所産と考えられるが、この種の形態は当地方においては稀薄なものといえる。

甕は、その形態等からA～Dの4種に分けられる。

A類(6) くの字状の口縁を有し、端部を単に丸くおさめるもの。第1トレンチSK1より出土しており、古式須恵器や漢式系土器が共伴した。体部は欠損するが、比較的長胴になるものと思われる。

B類(7) 所謂布留式の系譜を引く口縁端部を肥厚されるものである。口縁部は真っ直ぐ外方へ伸びてその端面は広く拡張し、ほぼ水平で布留式においても新しい要素を備えている。管見において併行関係を抽出するならば、奈良県の上ノ井手遺跡井戸上層出土の資料が好例と考えられる。³

C類(8) 弥生中期に出現する近江型と呼称される受口状口縁の系譜を引くものである。口縁部は頸部でく字に屈折し、内湾気味に曲折して僅かに受口風を呈している。端部は外方へつまんでおさめている。最大径まで残存しないが、さほど胴張りすることはないものと思われる。体部外面は左上りにやや荒目のハケでおさめ、内面も左上りのハケ調整した後にナデ消して仕上げており、ヘラ削りは施さない。胎土中には、比較的多くの砂粒を混入する。

D類(9) く字の口縁を有し、端部は平坦な面におさめている。体部上位の外面は、左上りの比較的荒目のハケ調整する。内面は、ヘラ削りを施すことなくナデて仕上げている。9はC類の8と第16トレンチのS R 5第5層で共伴しており、型式的にも同時期とみなしてよいものと思われる。

以上、A～Dの4類の甕について通観してきたが、これらは時期的に近似するものと思われ、6が古式須恵器を伴出しており、総じて5世紀中頃の年代を与えることで大過ないものと考えている。

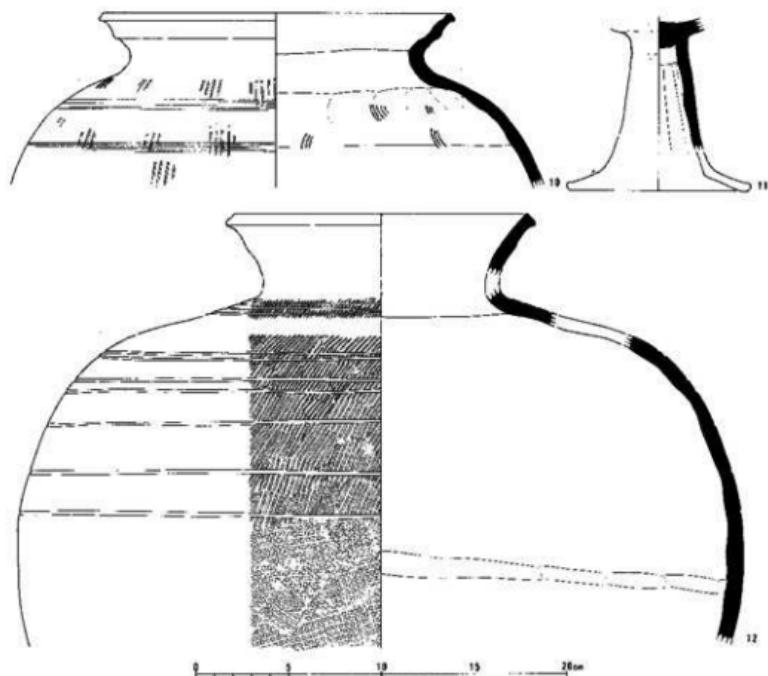
SK1出土土器類（挿図5） 前述したように、甕A類と伴出して古式須恵器、漢式土器、高杯B類等が検出された。

須恵器の甕（10）は、口縁部を逆く字に小さく屈折して外方に開く。口縁端部は僅かに凹みながら面におさめている。肩部は張り出し、胴張りするものと思われる。成形は、や

や細目の平行タタキを用い、カキ目調整した後ナデて仕上げている。内面は丁寧にナデて仕上げるが、古式須恵器に類例の多い細目の条線をもつ同心円の当具の痕跡が僅かに認められる。器体に比して、器壁は6mm程度と薄い。胎土には、砂粒をほとんど含むことなく精緻といえる。色調は、やや背青を帯びた淡灰褐色を呈する。器壁の断面の中央部がセピア色を呈することも古式須恵器の特徴といえる。

高杯B類（11）は、脚筒部内面を時計廻りのヘラ削り調整で仕上げている。摩滅が著しく外面の調整は判然としない。胎土は、砂粒をやや多く混入して粗く、色調は淡褐色を呈する。

所謂漢式系土器（12）は、体部上位を残存する。口縁部は外方へ開き、端部は面におさめている。体部は肩部が強く張り、全体にすんぐりした特有の形態を示している。成形は、



插図5 SK1 出土土器類



挿図 6 漢式系土器拓影(原寸)

最大径を境界に二種のタタキで成形している(挿図6)。下位は、一辺が1.5mm程度の正格子タタキを用い、上位は条数6本/cmと細筋の網籠のタタキをやや右上りに行う。タタキで成形した後、最大径上位には幅2mm程度の蝶施文を不規則な間隔で、頸部まで施している。体部内面は微小ながら凹凸が目立ち、タタキ成形の際に何らかの当具を用いたことを示し、総じて丁寧にナデて仕上げている。胎土中には、1mm前後の石英、長石、チャート粒等をやや多く混入して粗い、色調は器表が青味を帯びた乳褐色を呈し、断面中央は乳灰色を呈してサンドイッチ状をなしている。焼成はあまり明るかに陶質であり、窯窓で生産されたことを示唆している。

なお市内において、漢式系土器は他に知られず、本資料が初例である。今後、類例資料が増加したなら、須恵器生産の導入とも併せて再考せねばならない。

(2) 平安時代以降の土器類(挿図7)

平安時代の土器類として図化出来たのは、黒色土器、須恵器、灰釉陶器等がある。

黒色土器の椀(21・22)は、口縁端部をシャープにおさめて内面に明瞭な凹線が一条巡る。器表が摩滅しており暗文およびヘラミガキの手法については明確ではない。胎土は砂粒をほとんど含まず精良で、色調は淡褐色を呈している。

21・22の黒色土器と胎土が同一の土師器の杯(20)が検出されている。口縁端部はヨコナデして丸くおさめている。おそらく21・22と同時期の所産とみなされるが、厳密な時期は限定的な資料であり断言できない。

須恵器の杯(23)は、底部はヘラ削り調整することなくヘラ切りのままで仕上げている。胎土には、1mm前後の石英、長石を少量混入し、色調は淡青灰色を呈する。

14は須恵器の碗の底部と思われる。低い高台は付高台である。焼成はあまく、色調は淡灰色を呈する。

灰釉陶器(25・26)は、いざれも瓶子と思われる。25は口縁端部を欠損するものの、頸

部が太く比較的大型になるものと思われる。口頸部と体部の境界の断面から、両者を分割して成形し、接合したことが分かる(25)。色調は淡灰褐色を呈し、胎土はやや粗い感じをうける。水口町山の神古窯の灰原内から灰釉瓶子が出土しており、その生産地については今後詳細な検討をする必要があろう。

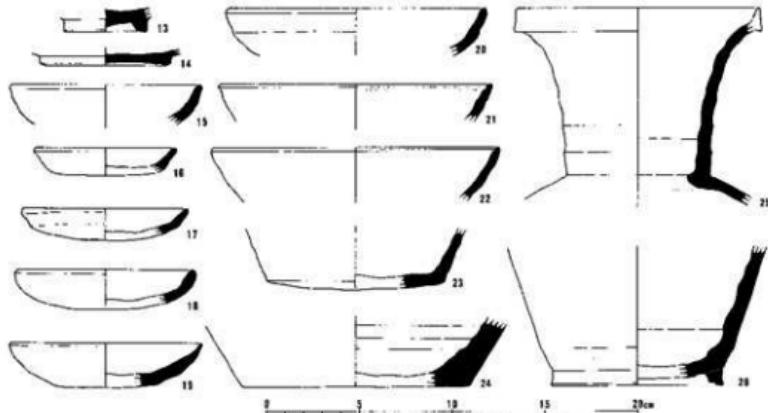
26は、最大径がさほど張ることのない形態になるものと思われる。体部外面は、ヘラケズリ調整して仕上げている。また、同内面はロクロナデの痕跡の凸凹が比較的顕著である。高台は貼付しており、端部はシャープにおさめて端面が僅かに凹む。轆轤上からの分離手法は、糸切りを行なっている。

中世の土器類としては、信楽焼、瀬戸、美濃系の施釉陶器が検出された。

13は、天目茶碗の底部である。露胎部には酸化鉄などの塗付は施さない。鉄釉が見込部に認められ、色調は暗茶褐色を呈している。

15は、内面および口縁部の外面に淡緑褐色の灰釉を施す皿である。口縁端部は、単に丸くおさめている。底部は残存しないが低い付高台を有するものと推定される。

信楽焼の甌あるいは壺の底部が検出されている(24)。底部外面は未調整、体部外面は板



挿図7 平安時代以降の土器

状原体で調整している。胎土には、2mm前後の石英、長石粒を多く混入するとともに、色調が淡赤褐色を呈して信楽製品の特徴をよく示している。

その他、土師器の小皿が数点図示出来たが、(16~19)層位的に、不明確な資料であり、時期については言及出来ない。

(岩崎直也)

6. 小 結

今回の調査で、土壌4基、溝6条自然流路5条などを検出した。

土壌は、古墳時代中期のものと、平安時代のものと、時期不明のものがある。調査範囲が限られていたため、各時期単独であったが、調査範囲を拡大すれば、複数の土壌が検出されたであろう。このうち、SK1の土壌内から土師器、古式須恵器を伴って出土した漢式系土器は、その類例からみて半島からの渡来人との関係を示すものである。時期は異なるが、「日本書紀」垂仁天皇3年、来遼中の新羅王子天日槍の従者が鏡山周辺に「近江国鏡谷陶人」として定住したと伝えられている記事が注目される。このことにより近江における、半島からの渡来人の実態が今後の調査によって明らかになるであろう。

流路からの遺物の出土は少なく、時期を明らかにすることはできない。その中にあって遺物が出土したSR3について若干述べることにする。4章で前述したが出土遺物には古式土師器や平安時代の土器等があり、その出土状況からして平安時代の流路であることが考えられる。また、この流路は現在の水田畦畔とも対応している点、黒橋川対岸の水路に対応している点など条里の方向、位置に対応しており、条里に關係する流路であると考えられる。最近の調査の成果によれば、奈良時代にさかのぼるものと、平安時代中期に施行されたとする。二時期に大きな画期があったのではないかと推測されている。⁵塙町南遺跡の場合、後者にあたるものと考えられる。この場合一筆一筆に小字が付けられていないことが注目され、その要因、原因等については今後の課題としたい。

他の自然流路は流木、木ノ葉等堆積しているものもあり、流れがゆるやかであったことがうかがえる。

遺跡の範囲は、調査地の全域にわたって広がっていることが判明した。前年度の調査で遺跡の範囲は東方に広がることが想定されていたが、むしろ西方の微高地につながるものと考えられる。今後「点」「線」的な調査でなく、「面」的な調査を行なうことによって、その実態が明らかになるであろう。

(篠宮 正)

註

1. 近江八幡市教育委員会『近江八幡市埋蔵文化財遺跡目録』1981
2. 宮崎幹也『県営干拓地等農地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—近江八幡市塚町遺跡—』滋賀県教育委員会、財団法人滋賀県文化財保護協会
3. 安達厚三、木下正史「飛鳥地域の古式土師器」(『考古学雑誌』第60巻第2号1974)
4. 丸山竜平「春日山の神古窯址の調査」(『滋賀県文化財調査年報』滋賀県教育委員会1975)
5. 丸山竜平「律令制の成立 耕地の開発」(『八日市市史』第1巻古代1983)
6. 前掲書註2



調査地遠景（東上空より）



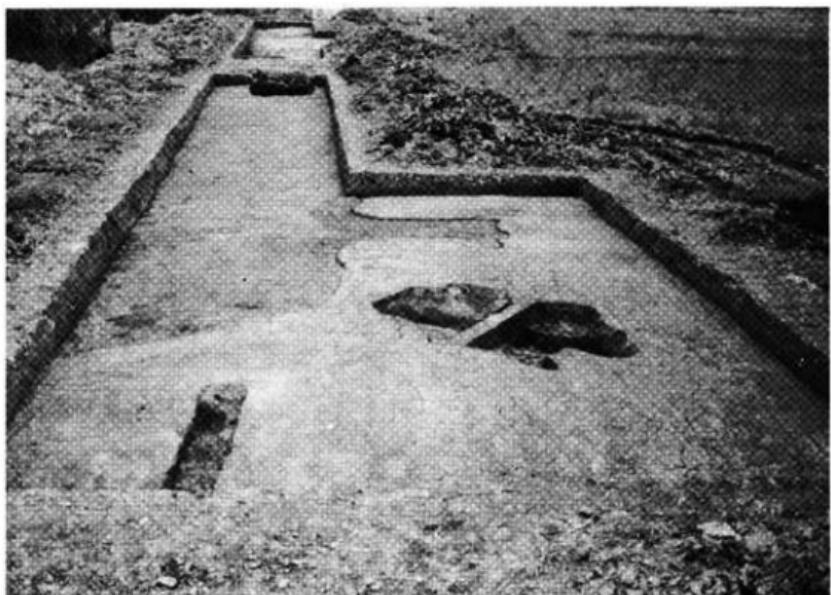
調査地遠景（中央が黒潮川と調査地）



第1トレンチ全景（北方より）



SK I 土器出土状況（南方より）



・第3トレンチ全景（南方より）



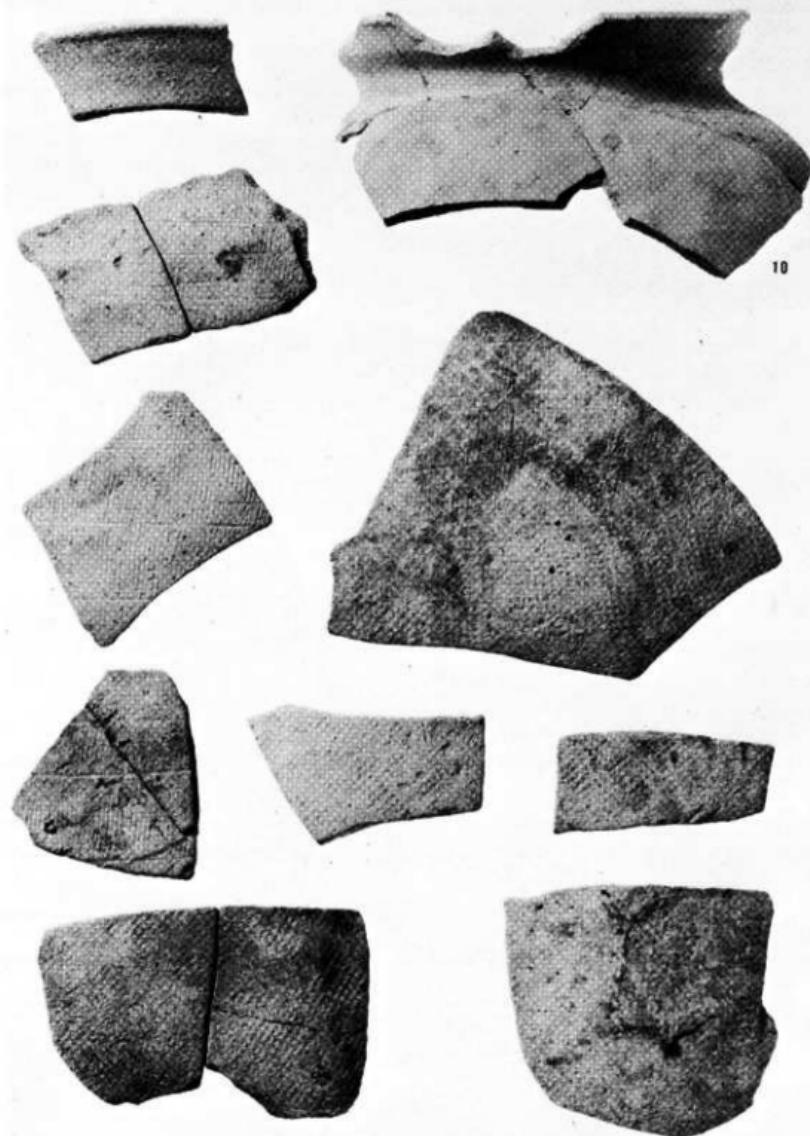
・SK2（北方より）



SR1 検出状況（南方より）



SR1 土層堆積状況（北方より）



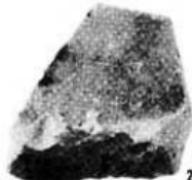
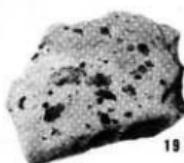
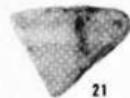
10以外は、12

図版六 遺物



：墳時代の土器類

図版七 遺物



図版八 調査区位置図



県営干拓地等農地整備事業関係発掘調査報告書II
—塚町南遺跡—

昭和60年3月

編集発行 滋賀県教育委員会
大津市京町四丁目1-1
印 刷 宮川印刷株式会社
大津市富士見台3-8
